

ついのべ抄

#003

たまには、と手紙を書く。

普段は電話かメールだけだから。

手書きの文字には想いが移り込むという。

らしくないね、とはにかむ顔を想像しながら綴る

文字は緊張しているように見えた。

内容すらも固く見えてきて、

手紙でいっぱいのごみ箱に投函。

当分送れそうにないとため息をつく。

ある日から音が見えるようになった。

小さな声でも悪態は真つ直ぐ向かう。

ため息はボトリと落ちる。

あくびはフワフワ浮かぶ。

笑い声は宙を転げ回る。

色は人それぞれ。

今まで出会った中でも

一際綺麗な笑い声を持つ彼女の「ねえ」は、

誰の音より僕の胸に突き刺さる

しとしとと降る雨も手伝つて、

日曜の朝は静かに幕を開く。

街を見下ろしながら進むモノレールは

暖まった眠気に満ちていた。

空が白み、街灯が白々しく見え、

それでも頑として光を放つ

遠くのコンビニの前で君の姿を見付けたから、

肉まんを買いに行こうと思ったんだよ。

「残念ですが」

と店主は苦々しく口にした。

「これを言い値でお預かりする事はできませんな」
当てにしていた反動で絶句する。

「大変すばらしい思い出です。

ですがもう、あなたの中では冷めてしまっている。
思い出はね、時価なんですよ」

思い出質屋店での一幕。

「思いニキビ見つけ。あ、思われニキビもある」
楽しげに僕の頬を指すきみの指をかわした。

「両思いなんじゃない？」

「だといいいね」

笑ったのは顔だけ。

そうではない事を僕は知っている。
思いニキビは重い想いでしかない

「行ってきます」

家を飛び出してすぐに一陣の風に巻き込まれた。

前髪を吹き上げる暖かい息吹に春を覚えた。

突き抜けて晴れた青空に桜色の欠片が舞う。

振り返れば膨れ上がる桜。

輝く桜色を携帯に収め、駆け出す。

午後起床。暖かい風。桜の木の下で。

胸の痛み。飛行機雲。桜の花びらの写メ。

深呼吸。踏み込むペダル。ピアノの音色。

食い意地。ならぬ、悔い意地。

坂道滑走。

線に変わる「止まれ」。

感謝。

桜色。

よくある事。

どこぞの階段を降りている自分と、

これが夢だと自覚している自分。

思った通り足を滑らせ、ビクンツと跳ね起きる。

まどろみを妨げられ苦笑する、よくある事。

だからきつとこれも夢なんだ。

浮遊感にしては狂暴な

落下速度が妙に生々しいだけの。

これは、夢。

二人並んで眺めた桜は淡い色なのに鮮明で、
言葉よりもため息しか出て来なくて、

春風に舞う花びらを惜しく思った僕は

「勿体ないね」

と呟いた。

「捕まえよう」

花びら目掛けて駆け出す、

きみといられる事がただうれしい。

「なんで？」

「どうして？」

探していた答えさえ掻き分けて

「？」

を重ねるばかり。

答えはきつともつと単純。

左右間違えたコンタクトより、

もつとずつと明快。

ついのべ抄

#003

了

Written by nakoso (as inabetz)

© nakoso 2010

<http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>

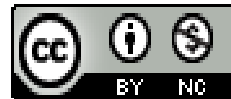
Release Date 2010/6/27

Twitter (as inabetz) :

<http://twitter.com/inabetz>

Mail :

nakosokan@gmail.com



「ついのべ抄 #003」

by nakoso is licensed

under a Creative Commons 表示-非営利 2.1 日本 License.

Based on a work at <http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>